2016 年度学術交流支援資金　報告書

大学院プロジェクト科目名：CB　認知・行為・メディアと言語・言語教育
研究課題名：教育・建築・医療融合型「アフリカに於けるHEALTH LIFE STUDY 望ましい基礎教育の方法」の普及に関する研究―コンゴ民主共和国を事例として―
研究代表者：慶應義塾大学環境情報学部　准教授　長谷部葉子

〈はじめに〉

まず最初に、2016 年度も学術交流支援資金に採択していただき、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科小林博人教授の建築チーム、環境情報学部長谷部葉子准教授の教育チーム、代表医学部安井正人教授、引率が看護医療学部藤屋りか専任講師の医学部・看護医療学部・薬学部から構成されるアフリカ医療研究会の医療チーム、総勢約 40 名が今年度も無事にアフリカのコンゴ民主共和国の地で無事にフィールドワークを実施し、実践的研究活動を終えることが出来たことをご報告するとともに、関係者の皆さまに心よりの感謝の意を表明いたします。

コンゴ民主共和国は現在大統領選挙を控え、政情不安定な現状は否めず、当初の研究計画を、国情を鑑みて柔軟に変更せざるを得ないのが現状です。2008 年度から毎年夏を中心的な活動期間として渡航し続け、2012 年度からは夏を中心的活動期間、春を夏の活動へ向けての準備期間として、年 2 度渡航するリズムを継続し、虎視眈々とプロジェクトの研究課題を見据えて、現地の関係者の皆さんと共に、プロジェクトを進めてきました。

〈2017 年度プロジェクト背景〉

2017 年度で本プロジェクトは実質 10 年を迎えます。コンゴ民主共和国は未だに世界最貧国と言われ、政情が安定する兆しは、今回の大統領選の見通しがつかない限り、何の保証もないのが現状です。しかし、2008 年から生徒数 0 から始めた小学校プロジェクトが、2009 年のアカデックス小学校開講日には、校舎 1 棟、小学校一学年 5 名のみの状態からはじまり、2017 年 2 月現在、校舎数 5 棟、幼稚園・小学校・中学校からなる全校生徒数 420 名の規模にまで育ちました。地域と共に、できるところから、できることを、校舎も学年も、1 年ごとに無理のない進歩を重ねてきた結果の現在です。

2007 年に本プロジェクトを立ち上げた当初、そして 2008 年に教員 3 名、学生 5 名での初渡航を実現し、2009 年に教員 3 名、学生 12 名でアカデックス小学校の開講式に参列したころ、これらの初期 3 年間は、周囲の関係者はその多くが、本プロジェクトの存続を 1 年ごとに危ぶみ、本プロジェクトをボランティア活動とみなし、その研究的及び教育的価値について懐疑的でした。

そして何よりも本プロジェクト立ち上げ当初から、本プロジェクトに関する質問として開口一番聞かれることは、「資金源」でした。そしてそこにはある思い込みが潜んでいます。

つまり、「資金源」を準備するのは、提供するのは途上国側ではありえない、先進国側であるのが当たり前という間違った思い込みです。まず本プロジェクトがここまで 10 年という歳月をかけて成長し続けてきたのは、現在では揺るぎない基盤が確立されているのは、本プロジェクトの立ち上げの当事者である、コンゴ人創立者、本塾環境情報学部非常勤講師サイモン・ベデロ氏の「釣った魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」という「当事者意識」を育む一貫した姿勢であったと断言できます。

そしてサイモン・ベデロ氏は、本プロジェクトにおいて、そのプロジェクト立ち上げ当初の建築資金、小学校の運営資金を可能な限り、自己資金と生徒からの授業料で自律的に運営してきた実績があってこその現在です。その立ち上げからの実績に基づいて、2015 年に外務省の草の根無償に採択され、全校舎を完成が実現しました。もちろん慶應義塾のプロジェクトチームの各関係方面からの研究資金、助成金、寄付金によって現状に至ることが出来たのは言うまでもありませんが、まさにこのプロジェクトのゼロから 1 をつくる、基盤に於いてはサイモン・ベデロ先生ご自身の当事者としての高い意識があったからこその現在であるということを明言しておかなければなりません。

〈研究意義〉

本プロジェクトが、現在まで存続した過程を振り返り、何の研究として一番貢献しているかといえば、コンゴ民主共和国と日本の相互補完的な「協働をカタチにする」過程、つまり関係性のサステナビィティの構築とその普及と定着にいたるまでの研究です。特に一般的に開発途上国と先進国といわれる 2 項対立がイメージされるプロジェクトに於いては、「資金源」とその「資金の流れる方向性」に焦点が当てられがちで、それによりそのプロジェクトの存続可能性やその存在意義が評価あるいは判断されがちです。

確かに「資金」は様々なプロジェクト実施において最重要事項に据えられがちですが、このような特に大学発信のソフト面に焦点を当てたプロジェクトに於いて、その価値や実績は、どのように手元に保証された「資金」をその額の大小に関係なく、人々、関係者に新たなカタチを共に実現する「力」をつくりだす「元手」として生かすことが出来たかにあるのではないでしょうか。

本プロジェクトでは、建築・医療・教育の 3 領域から、現地の関係者と共に、共に当事者としての共感を生み、共にカタチにし、共に残し、新たなカタチにつなげることへの共感性、習慣性、応用性を育むことに特に力を入れてきました。つまり「共に」という意識を、日本と現地の関係者との間に、そして建築・医療・教育の 3 領域の間に育み、「共に」一つの目的意識のもとそれぞれの立ち位置、専門領域から以下に多様で一貫性のある協働体制を作りあげるか、これこそが本プロジェクトの研究成果と言えます。

〈2016 年度活動報告〉

2016 年度の活動は、建築・医療・教育の各専門領域別にみても、領域横断的な視点から

見ても、目新しい取り組みは一つもありません。つまり、今までの取り組みの延長を、「大学側の一方的な提案に基づく現地の協力」という図式を払拭し、「共につくる」、「共に残す」、「共に発展形をカタチにする」ということに特化したのが、質的な目新しい取り組みであると言えます。日本人、コンゴ人共に、日本・アフリカと向き合う際の意識変容と態度変容をもたらし、一方的ではない、共感を生む、両国に双方向の成長をもたらす「協働のカタチ」の実現へ向けてのプロセスを育むプログラムがなければ、真の「協働」は生まれません。

この意識のもと、2016 年度のコンゴ民主共和国の大統領選を踏まえた政情を考慮して、関係者の安全を第一に本プロジェクトでは以下の内容を実践的に実施しましたので、ご報告します。今回は活動拠点を 4 か所に分けて、それぞれ自律的に活動し、その結果を融合するカタチを取りました。これは、できるだけ一つの活動拠点で、研究内容を深化させることと、セキュリティを第一に考慮したことから、移動の機会を少なくした結果でもあります。

≪活動拠点 1 ：アカデックス小学校≫

医療チームは全員活動拠点をアカデックス小学校に限定し、小学校での手洗い、歯磨きなどの日常的な衛生教育のワークショップを小学校の教職員共に実施し、例年度からの衛生教育の学校生活及び家庭生活への普及と浸透度合い調査しました。また 5 年目を迎える、小学校の全校生徒を対象とした健康診断、楽しみながら行う体力測定（ミニ運動会）を開催し、児童の成長の過程を調査しました。例年は、医療チームが中心となって、地域の医療関係者の協力を得て全校生徒の健康診断を実施してきましたが、2016 年度は、健康診断 5 年目を迎え、小学校の教職員を交えて、実施までの打ち合わせを綿密に行い、共に実施したのが大きな成果と言えます。つまり、義塾の医療チームの渡航が行われなくても、毎年夏に全校生徒の健康診断、体力測定、衛生教育が、地域の医療スタッフと小学校の教職員の連携で持続的に実施されることを前提としています。

建築チームは 2016 年度は、前年度に建設した小学校内保健室の内装と家具作りを、小学校の教職員と共に作りあげ、自分たちの小学校の保健室で、自分たちがその保健室をどのように子どもたちに提供していくか、どのような機能を備えた魅力的な場所にするかということを、家具作りや、内装のペンキ塗装などを共におこなうことで、当事者意識を育み、保健室の存在意義を共有する取り組みを行い、成長期の小学生に喜びと安心感を与える保健室を完成しました。

教育チームは、例年に引き続き、チョークづくり、ミシンでのモノづくり、異言語・異文化理解、表現教育としてのダンス、高校生チームによるミュージカルを通して、小学校での授業としての学びをワークショップにより、具体的にカタチにする取り組みに力を入れました。2015 年度に職業訓練大学校へ高学年の遠足を実施し、「学びと仕事」のつながりを小学生がイメージしやすい学習環境構築に力を入れてきました。小学校での学びが、カタチにする取り組みにより、将来の仕事、進路選択にまでつながるストーリーをわかりやすく小学生、ひいては保護者の皆さんに具体的なイメージを伴った理解と共感をえることで、アカデ

ックス小学校の安定した就学率につながっています。

開校当初、アカデックス小学校はもともと小学校のみの計画でしたが、保護者からの強い要望があり、中学校開校が実現し、現在は高等学校開校の準備も始まっています。また上記の教育チームの取り組みの中でも特に、チョークづくりは、日本のチョークメーカーのご協力を得て、質の良いチョーク生産が小学校のカリキュラムのみならず、小学校の一部教職員の作業として、定着し、地域の教育機関に販売するまでに普及・定着しています。

その結果、チョーク製造・販売の新たなビジネスモデルが小学校の一ワークショップから生まれました。このチョークビジネスが小学校から生まれたことにより、その売り上げが小学校の椅子や机などの学習環境の整備や学内の兄弟で在籍する児童への奨学金として機能しています。いまこのチョークビジネスの担い手は、小学校開校当時からの関係者であり、若い協力者であった、大学生 2 名で、ｱﾝﾄﾚﾌﾟﾚﾅｰ育成につながっていることは、大きな成果と言えます。

特に 2016 年度の教育チームのワークショップには、小中学校の教職員が担当制で積極的に関わっており、教育チーム渡航時期以外でも、小学校のカリキュラムに組み込まれ、日常的に実施される基盤が整いました。今年度になり、小中学校の先生方からワークショップに関して活発な意見が多く発信され、共にカタチをつくることが実現しました。

以上がアカデックス小学校での具体的な取り組みですが、この小学校は本プロジェクトの基盤となる拠点で 10 年の歳月を経ただけの積み重ねが、今年度の実績としてカタチに現れました。つまり一方的な点としての活動ではない、恒常的かつ日常的な現地が主体性をもった小学校カリキュラム構築、運営体制の定着が日本との協働によるソーシャルトランスフォーメーションのカタチになってきたといえます。ここまで資金面、意識変容、態度変容面に於いても無理のない、持続可能なカタチの協働での実現を目指した結果、その普及と定着に 10 年の歳月をかけたことになります。ここから次の段階に向けて、小中学校の教育モデルに初期段階からアントレプレナー育成を視野に入れたモデルづくりを検討し始めています。

≪活動拠点 2 ：NGO アプロフェッド≫

この NGO とは 2011 年からパートナーシップを結んでいます。

NGO アプロフェッドは、水道、電気等のインフラ及び、学校、教会、医療施設が皆無の貧困地域で、ストリートチルドレンの教育、シングルマザーの自立支援のための職業訓練、農業、井戸などのインフラ整備を、小さな国造りレベルの高い意識で実践的に取り組んでいます。慶應義塾塾員で構成される認定 NPO あすなろの会では 2012 年から 6 名のストリートチルドレンに高校卒業までの里親制度による奨学金を支給する形でのパートナーシップを結んで活動してきました。

NGO アプロフェッドはその運営基盤がしっかりと安定しており、組織体制も整っている

ため、日本国大使館の信望もあつく、現在にいたるまで 2 度にわたり、日本国外務省草の根無償資金で地域への 6 つの井戸の提供、2016 年度には地域初の小学校の開校実績を持っています。コンゴ民主共和国で 100%コンゴ人の運営による成功し、着実に実績を挙げているモデル的な NGO です。

日本からコンゴへフィールドワーク、実践的研究に訪れる高校生、大学生にとって、現地の視点にたった滞在型スタディプログラムを提供できる教育機関であると判断し、2016 年度は、本プロジェクトの教育チームの学生 2 名を対象に、2 週間の滞在型スタディプログラムを、NGO アプロフェッドと協働で作成し、実験的に実施しました。初の試みでしたが、地域の日常生活をその一員として、水汲みから調理、生活習慣、社会的慣習に至るまで集中的に学び、同時に NPO の活動の一端を研修生として経験できるスタディプログラムは、学生にとって非常に多くの学びと気づきをもたらし、個人の研究を探求し、研究指針の見直しの機会となりました。

今回のスタディプログラムを、2017 年度春は日本からの本プロジェクトの初心者向け、2017 年度夏は、高校生と、大学生中級者向けに新たに策定して、提供することで、NGO アプロフェッドにとっては、コンゴ民主共和国と活動への認知度、理解を高め、さらに教育ビジネスの新たな側面を開拓し、さらなるパートナーシップ模索の機会につながり、日本からの学生にとっては、信頼関係のある環境で、本質的な理解と探求を得られる貴重な教育、研究拠点としての新たな位置づけを NGO アプロフェッドに見出すことができました。これは今後のさらなる理解と関係性構築に大きな一歩をみ出せたといえます。

≪活動拠点 3 ：私立プロテスタント大学（以下 UPC と略）大学院ソーシャルトランスフォーメーション学科≫

2016 年 3 月より、教育チームの担当教員が首都キンシャサ市内私立プロテスタント大学大学院ソーシャルトランスフォーメーション学科で、1 週間の集中講義を開講しています。これは、「教育の分野から日本との協働で始めるソーシャルトランスフォーメーションのカタチ」を実践的なプロジェクト案を策定することで当事者として具体化していくことを目的としています。

この 3 月の講義を基盤として、8 月には、8 月 9 日―12 日まで上記のテーマでシンポジウムを開催しました。内容としては、NGO アプロフェッド、上記アカデックス小学校での過去 10 年間の取り組みを具体的なモデルケースとして提示し、それをもとに、実践的な取り組みをコンゴ、日本両国の研究者、教育関連業種の専門家が講義、ワークショップを提供するもので、フィールドワークとしては、日本の上総掘り井戸の紹介と郊外の集落での井戸掘りの実践を実施ししました。上記学科の修士課程の大学院生 50 名を中心に連日学びの場が活発に展開しました。

それと同時に、さまざまな意識・態度・価値観の違いが露呈し、フィールドワークの実施は、困難を極め、滞在予定期間内では、実は上総掘り実践は完成しませんでした。しかし日

本人技術者の帰国後、夏の問題や課題の反省を両国で積み重ね、来年の夏の渡航時の完成に向けて、試行錯誤が持続的に繰り返されていること、また上総掘り井戸を UPC のキャンパス内で、別途 UPC の大学院生のみで再現し、成功して水がキャンパス内で得られるようになったことは、今年度の実績として挙げられます。

≪活動拠点 4 ：国立教員大学 ISP ゴンベキャンパス≫

2009 年から、コンゴ政府高等教育省マシャコ大臣（当時）の命を受けて、日本語教育を国立教員大学で本プロジェクトの教育チームが開始しました。岩崎美紀子先生開発の日本語教授法岩崎メソッドで、日本人若手日本人教師を育成し、2 年間に ISP に長期滞在者として派遣して、日本語教育の普及と定着に、ISP と慶應の両校で尽力してきました。

2012 年には、日本語コースの成果をコンゴ民日本国大使館に認めていただき、同 ISP ゴンベキャンパス敷地内に、NPO 団体に昇格した、アカデックスが慶應義塾大学本プロジェクトとの協力のもと、日本国外務省草の根文化無償の助成を受け、コンゴ・ジャパンコンプレックス（通称日本文化センター、正式名称コンゴ ・日本言語文化交流センター）を開設しました。現在に至るまで、日本国大使館の協力を得て、日常的に日本語コースが開講され、音楽会、日本映画鑑賞会、日本食や日本人の価値観に関するレクチャー・交流会などが活発に開催されています。

将来的に、日本型ｿｰｼｬﾙトランスフォーメーションコースを立ち上げることを視野に日々研鑽を積んでおり、本プロジェクトの教育チームはその運営とカリキュラムに関して、現地のコンゴ人スタッフと共に、その実践に向けての調査と研究を重ねています。

2016 年度は、11 月に慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科、環境情報学部、総合政策学部の 3 学部と国立教員大学 ISP ゴンベ校と 5 年間の交流協定が結ばれました。これを機に研究者と学生の双方向的な活発な交流を現在調整中で、この 5 年間で ISP ゴンベ校には、日本研究のコースを、慶應義塾 SFC には、コンゴ民主共和国を発端としたアフリカ地域研究の確立を目指す基盤が構築されたことは、大きな成果と言えます。

以上を持ちまして、2016 年度本プロジェクトの実践的活動報告とさせていただきます。この研究成果は 2016 年度 SFC 研究所主催の Open Research Forum に出展し、さらに今 2017 年度の諸学会での発表の準備を進めています。

本プロジェクトの研究成果と現在に至るまでの研究プロ瀬薄は、画像ではなく、以下の動画からご確認いただけると幸いです。

2016 年活動映像：https://www.youtube.com/watch?v=UPR_9qBDe_E

2015 年活動映像：https://www.youtube.com/watch?v=dn3xPw34_gM

2014 年活動映像：https://www.youtube.com/watch?v=ZCZRsjpeNbw

2013 年活動映像：https://www.youtube.com/watch?v=GwVGwnxvM2Q

2012 年活動映像：https://www.youtube.com/watch?v=bbxtnEQ8i38

2011 年活動映像：https://www.youtube.com/watch?v=h_CrLycX8D0

2009 年活動映像 https://www.youtube.com/watch?v=h_CrLycX8D0

文責：研究代表者　慶應義塾大学環境情報学部　准教授　長谷部葉子